

保育における「安全教育」の考察 — 幼児の危険察知・回避能力をもとに —

橘田 重男 小澤 光美

**キーワード：安全教育 危険察知・回避能力 遊びと体験
はじめに**

近年の子どもの事故に関して、日本体育・学校保健センターによれば、「転んだ時に手が出ず、顔面や頭部を損傷する」といった報告^①が多くある。これは幼児の体型の特徴にもよるが、反射動作・受け身動作などの運動機能に起因する部分があると思われる。筆者らの子ども時代もそうであったが、子ども達は屋外で自由気ままに遊び、擦り傷・切り傷などのけがは日常的にあった。しかし、転んで顔や頭にけがをするようなことはなかった。本能的に、また体験的に手を付いたり体を操作して、顔や頭のけがを回避していた。

また先の東日本大震災を機に、危機管理・安全管理や安全教育などが注目されている。東日本大震災においては、子ども達の被害も甚大であった。教育・保育現場での被害も数多く報告された。そうした多くの悲慘な事例の中にあつて、人的被害を最小限に食い止めたものがあつた。後の取材によれば、その保育現場では避難訓練を定期的 to 実施し、現場の危機管理の徹底とともに、幼児自身の災害時への意識や適応力が高まっていたことが考えられるのではないかと思う。

本論においては、安全教育に関して「安全管理」の面からではなく、幼児が自らの行動や外部環境に存在する様々な危険を制御して安全に行動できるようになる危険察知・回避能力をもとに、「安全教育」の視点に着目しながら考えていく。本研究の意図に沿った具体的な「安全教育」の実践を整理し、保育者の意識調査をまとめ、筆者による実践を通して述べてい。

1. 安全教育に関わる幼稚園教育要領や保育所保育指針の記述

(1) 幼稚園教育要領の「健康」領域と保育所保育指針の健康に共通する記述

- 「1. ねらい(3)健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける」
- 「2. 内容(10)危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する」

(2) 幼稚園教育要領の「健康」領域

- 「3. 内容の扱い(2)様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、安全についての構えを身に付け、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること」

(3) 保育所保育指針の第五章 健康及び安全 2 環境及び衛生並びに安全管理

(二) 事故防止及び安全対策

- ア. 保育中の事故防止のために、子どもの心身の状況等を踏まえつつ、保育所内外の安全点検に努め、安全対策のために職員の共通理解や体制作りを図るとともに、家庭や諸機関の協力の下に安全指導を行うこと。
- イ. 災害や事故の発生に備え、危険箇所の点検や避難訓練を実施するとともに、外部からの不審者等の侵入防止のための措置や訓練など不測の事態に備えて必要な対応を図ること。また、子どもの精神保健面における対応に留意すること。

以上のような記述があるが、その中で本研究の幼児自身の「危険察知・回避能力」に特に関わる部分に着目してみると、①「危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する」②「安全についての構えを身に付け、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つ」の2点が挙げられる。

2. 幼児の遊び体験と、危険察知・回避能力との関連

(1) 遊びの危険性と事故

本来の楽しい遊びとは、スリル感がありチャレンジ性に富むものである。しかしひとつ間違えば事故につながる危険と隣り合わせのものである。かつてはこの境界線を、実体験を通して知ることがあった。例えば橘田2012⁽²⁾によれば、「下り坂でのタイヤ転がしのスリル感とスピード感がたまらなく、かけがえのない実体験であった」と幼少期を振り返っている。また、教育実習生の実習記録⁽³⁾によると、園の教育方針の中心に「遊びながら学ぶ」があるが、実際には保育者からの抑制が強いために、遊びを通して学んでいく危険・察知能力にはつながらないのでは、と記録している。

(2) 危険と安全の気付き

幼児には生活の中で、実際の場面に即して危険に気付かせていくことが重要だと言われている。視覚的な教材よりも、その時に実際に注意を受けたり気付かされたりすることの方が実感的に理解できる。安全に対する認識は生活経験と深い関係がある。園内での経験に加えて、家庭内でどのような経験をしてきたのか、その時の保護者の対応によって幼児の受け取りは異なってくる。少しでも危険と思われることをする前に禁止されてきたとすれば危険察知の認識は深まることはない。豊富な経験を通して安全性につながっていく。園内においても全てを禁止の場合、どこまでが安全でどうすれば危険なのか分からないままになる。実際の場面で安全と危険について気付かせることが重要である。園内で保育者が危険と感じる場面の例として、岡本⁽⁴⁾は以下を提示している。

- ・ 高い所から飛び降りる
- ・ プランコのそばを通り抜ける
- ・ ハサミをぎこちなく使う
- ・ とがった物の先を人に向ける
- ・ 高い所で人を押す

また、「子どもの安全能力を高める」視点から、「子どもの体験不足からか、危険を感じず突進する子が増えている。危ないから、と全てを取り除くのではなく、生活や遊びの中で体験学習させたい。このように日常生活体験の中から危険予知・危険回避を学んでいく機会が減ってきているので、生活や遊びの中でそれらを体験学習できるよう取り組む。」と述べている。他方、宮田⁽⁵⁾は「遊びに学ぶ子どもの安全」の視点から、「鬼ごっこやかくれんぼなどの昔懐かしい遊びを楽しみながら学ぶ。緊急時に必要な力は、走る・叫ぶ・コミュニケーション力であり、防犯のための運動遊び」を提示している。

3. 「安全教育」に関わる事例

(1) 「安全教育プログラム」東京都教育委員会(平成21年度策定)

実践編「幼稚園年間指導計画」

特設する安全に関する保育実践事例 5歳児「健康」

本時の展開

*ねらい・身近にある簡単な交通標識に関心を持つ。

・親子一緒に歩き、信号の見方、正しい歩き方を再確認する。

*展開(省略)

(2) 危険予知トレーニング「KYT」⁽⁷⁾

子ども自らが危険を予測し、回避する能力を高めるトレーニング法であり、全国子ども会連合会が開発した。

①ねらい

- ・全員参加でチームワークや感受性を高める。
- ・みんなで危険を発見し、対策を考え合い、分かり合って実行する。

②期待される効果

- ・注意：興味の持てる方法なので、注意を良く聞いていないといった子どもが少なくなる。

- ・興味・利益：ゲーム的要素があるので、興味がわき、学習効果が上がる。
- ・欲求：指導者が一方的に指示する注意ではなく、子どもそれぞれが自分の問題として考えやすく、話し合いが活発になる。
- ・記憶：実習によって注意力を喚起し、危険予知・回避能力の高まりから記憶に留まる。
- ・行動：具体的な安全教育であるため、行動へつながる。

③トレーニングシート^⑧

作業や活動の状況を描いたイラストシートを使って、「どんな危険がひそんでいるか」「その危険がどんな現象を生み出すか」をチームで話し合っ

(3)東日本大震災の事例

①「釜石の奇跡」と呼ばれる好例がある。これは震災時、釜石市内の約3000人の小中学生の殆どが無事だったという驚くべき事実である。学校に登校していた児童・生徒が迅速な避難行動で難を逃れた。新聞記事によると、同市教委が2005年から「津波てんでんこ」^⑨の普及を進めるなど、津波防災教育に取り組んでいたのである。これを機に、防災教育のモデル地域として整備することにもなった。

②名取市のM保育所では、所長の指示で一時避難した幼児54名を職員の車に次々に乗せて小学校の3階に避難し無事であった。中には15人も乗ったワゴン車もあった。そこでは津波に対する危機感が強く、毎年夏に実施される地区の防災訓練に参加していた。所長は「訓練で体に危機感を染み込ませることができたからこそ、全員無事という結果につながった。」と振り返っている。

4. 保育士への「危険察知・回避能力」に関するアンケート調査

対象 保育士30名(山梨県内と長野県内の保育所)

方法 学習会及び講座(7月)の中で10分程度の筆記回答

①現在の幼児の危険察知・回避能力の程度について

○十分ある(0)

○ある程度ある(5)

自由記述の理由

「保育の中に運動能力を高める取り組みを意図的に行っているから」

「激しい遊びの中でも、お互いに手加減して気を付けている姿を見るから」

「危険のないように、子どもを守り過ぎてしまう場合があるから」

●あまりない(20)

自由記述の理由

「何回注意してもしてしまうように、同じことを繰り返す」

「いけないよ、危ないよ、と言ってしまう行動が多い」

「周囲の状況をよく見ないで行動してしまう場面がある」

「遊びなどに集中している時ほど事故やけがにつながっている」

「実際にトラブルが起きたりけがをすることがある」

「前から来る物や人を避けられないことがある」

「年少児や未満児は家でも園でも守られている」

「友達と思い切りぶつかることなどが見られる」

「園で危険と思われることなど、いろいろなことをやらせられない」

「散歩で車が来てもふらふらしたりキョロキョロしたりしながら歩いているから」

「危険の前に大人が先回りして助けてしまう」

●ほとんどない(5)

「まだ幼くて、経験が少ない」

「注意したことができていない」

「どこが危険なのか、分かっていない」

「子ども自身がトラブルに直面する機会が少ない」

②園生活での具体的な場面について(自由記述)

- ・友達がブランコに乗っているそばを通る
- ・鉄棒や渡り棒から急に手を離してしまう
- ・段ボール箱を押して遊んでいて、ぶつかりそうになる
- ・重い物を引きずり回す
- ・着替え中で廊下に人がたくさんいる中、廊下を走り抜けてしまう
- ・保育室のドアやトイレのドアの開閉の時に指を挟む
- ・高い所に上って飛び降りる
- ・滑って転倒する
- ・おもちゃの取り合いなどで、噛みついたり引っ掻いたりする
- ・バランスの悪い所でも平気で上る

③必要だと思う取り組みについて(自由記述)

- ・マニュアル化しない経験もさせながら、自分で気付くような機会も必要である。
- ・避難訓練を重ねるが、食事中や午睡中などにも実施する。
- ・事前に知らせることや何か起こった時にその都度注意を促す。
- ・運動遊びや外遊びなどを積極的に取り入れてバランス感覚や判断力を身に付ける。
- ・子どもに具体的な、危険な場面や場所を示し、繰り返し指導する。
- ・子どもに考えさせ、場合によってどう行動するかという意識を高めていく。
- ・家庭で取り組んで欲しいと思うことがある。
- ・関係のある絵本、紙芝居、ビデオなどで関心を向けさせる。

【考察】

保育現場に携わる保育士の多くは、現在の幼児に「危険察知・回避能力」があまり身に付いていないと思っている。それは園内の日常活動の中で、危険を伴うような幼児の行動を通して感じている。年齢や発達段階によるが、幼児の

「危険察知・回避能力」の重要性を認識している。また幼児の体験不足を指摘し、体験の必要性を感じているが、取えて経験させることが難しい点も挙げている。そうした中で、日常の場面を取り上げて注意や指導を行っている。また避難訓練等を通して体験を積んでいる。

5. 「安全教育」の実践

(1) 実践プログラム

安全基礎体力・事故防犯意識の養成に向けて、プログラムの体験を通して、効果的にその能力開発を行うものである。かけがえのない命を大切にする心と体づくりの一環として集団遊びなどを通して、危険察知・回避能力を身に付けようとするものである。

(2) 指導案

① 設定理由

かけがえのない命を大切にできる心と体づくりをめざした健康安全郷育プログラム「ミットパーカッション®」⁽¹⁰⁾のアクティビティー（危険回避のあそび等）やメインパート（リズム体操・リズム運動等）を通して、家族で楽しみながら、幼児の安全基礎体力を身につけると共に、親が我が子の危険察知・回避能力の現状を知る。

③ ねらい

幼児が大きな声を出しながら、楽しく身を守る運動遊びができる。

④ 対象

幼児・小学生とその保護者

⑤ 日時・場所

平成24年7月14日（土） 午前10時～11時30分

山梨県甲府市川田町 山梨県立青少年センター 多目的ホール

⑥本時の展開

時間	幼児の活動	内容・援助	備考
10分	・助けてダッシュ (アクティビティー①)	<ul style="list-style-type: none"> ・安全な間合い(2・4・6 歩)を知る ・20 歩を声を出しながら走りきれる ・年長者のよき手本を提示する 	コーン
20分	・デンジャラスロープさん (アクティビティー②)	<ul style="list-style-type: none"> ・足下に気を付けて、様々な危険回避の動きをしながら走れる ・避ける、跨ぐ、潜る、屈む、反る、這う、匍匐前進、タイミングをとる等の体の使い方を提示する 	黒黄ロー コーン
20分	・ミットパーカッション (アクティビティー③)	<ul style="list-style-type: none"> ・人や物との安全な間合い(距離やタイミング)を知る ・五感を刺激しながら協調して運動する楽しさを知る ・年長者のよき手本を提示する 	キック ミット CD
10分	・「エンジョイ！リズテコ」	<ul style="list-style-type: none"> ・危険回避の動きが入ったりズム体操を集団で楽しむ ・大きな声を出す、膝をしっかり上げる、半身で立つ等の体の使い方を提示する 	CD

(スナップ写真)



A



B

⑥評価の観点

- ・その子なりに、あるいは、年長者の真似をして、声を出そうと努力しているか。
- ・危険回避の動きを指示されたように、あるいは、年長者を模倣して行おうとしているか。
- ・集団の中で、楽しく学び合いながらリズムにのって運動遊びをしているか。

(3)実践の分析

①幼児の活動の様子

○評価の観点に関わって

- ・アクティビティー①②は、親～小学生～幼児の順に行った。幼児は2回見ることで、見よう見まねであるが、主体的に活動している。
- ・危険察知・回避のねらいは理解してはいないながら、「①声を出して思い切り走る」「②コース上のロープを避ける」活動そのものができることを目当てに行動している。
- ・親に目がいく中で、幼児グループ内の隣の友達と声を掛け合いながら、笑顔で楽しく活動している。

○危険察知・回避能力に関わって

- ・アクティビティー①において、大声を出しながら一生懸命走っている。
- ・アクティビティー②において、70cmに張られたロープを体を屈めてくぐることは容易にできるが、反ってくぐる事がスムーズにできない。「反る」動作そのものが日常生活ではほとんどないことが影響していることも考えられる。
- ・アクティビティー②において、ハイハイは比較的スムーズにできている。実際に乳児の時にしていた動作である。一方、匍匐前進では腕の力がまだ弱いこともあるが、体の捻りをはじめ全身の推進力が機能できていない。クモ歩きでは、尻が床についたまま進んでいる。慣れない動きに全身をコントロールできない状況である。
- ・アクティビティー③において、親のキックに対してミットでの受け身が自然にできている。ミットをしっかり持ち、両足を踏ん張り、「心身の構え」につながっている。

○抽出児童(3歳男児)

- ・プログラムの進行に関わらず、自分の思いのままに動き回り、暫くすると母親の膝元に戻ることを繰り返している。幼児グループで活動する時は、母親に手を引かれたり年上の幼児の後をついて行ったりしている。
- ・ステージから約50cm下のフロアーに降りる時、プログラムのはじめではフロアーから20cmの中段に降りてからフロアーに飛び降りたが、後半では周囲を見てから一度に飛び降りた。アクティビティーを体験した成果なのかは不明であるが、何らかの影響があったことが考えられる。

②まとめ

保護者の感想に「今回のような講座を体験して、子どもなりに危険に対する心構えのようなものを体感していくような気がする」とあるように、危険察

知・回避能力開発に向けての取り組みを通して、子どもなりにその能力を身に付けていく契機になっていると考えられる。今後はアクティビティを精選しながら焦点化を図り、引き続き実践を積んでいきたいと考える。

6. 成果と課題

本研究を通して危険察知・回避能力に関わる周辺事情を整理することができた。東日本大震災以来、注目される分野であるが、日常実践レベルではまだ不十分な状況である。保育士への調査と実践プログラムへの取り組みを通して、危険察知・回避能力開発の方向性を探る契機となった。直接的にまた間接的に幼児の体験等を仕組みながら、実践を積み重ねることで、新たな展開が見えてくるものと思われる。課題としては、先行実践を精査して、生かせる部分を取り入れながらプログラムに反映させ研究を深める必要がある。

おわりに

今回は共同執筆という形で試みたが、保育における安全教育に関わる新たなテーマに取り組む良い機会となった。今後も引き続き危険察知・回避能力開発に向けて取り組んでいきたいと考える。その中で更に、保育の現場で日常的に取り組めるようなアクティビティーのプログラムも検討したいと考える。

最後になりますが今回の講座参加者の皆さんや調査に協力して下さった皆さんに心から感謝致します。

【注】

- (1)『日本体育・学校健康センター 報告書』2002年より
- (2)橘田重男「幼少期の原体験に関する一考察」より
- (3)学生Mさんの「教育実習ノート」記述より抜粋
- (4)岡本(日本保育協会研究員)のレポートより
- (5)宮田美恵子(日本子どもの安全教育総合研究所)のレポートより

- (6) K Y Tは、K(危険)・Y(予知)・T(トレーニング)の略語
- (7) トレーニングシートは、絵がかいてありその中から危険を読み取るシート
- (8) 「津軽てんでんこ」とは、過去の津波災害の経験から、地震の後はとにかく高い所へ逃げるのが大切だという教訓
- (9) 「ミットパーカッション®」はリズムオブラブオリジナルのキックミットを足で蹴る動作を基本にしたアクティビティー

【引用・参考文献】

- 飯泉知花・久木章江「幼児期の防災教育のあり方と教材の作成」日本建築学会
学術概集 2004
- 伊藤忠記念財団『子どもの危機管理の実態とその改善方策に関する調査研究』
2004
- 江尻桂子「幼児・児童における危険状況の認知の発達」文部科学省科研費研究
報告書2010
- 小澤光美『リズムテコンドー®実践ガイドブック』リズムオブラブ 2010
- 橘田重男「幼少期の原体験に関する一考察」信州豊南短期大学紀要第29号
2012
- 『0歳からの子どもの安全教育論 一家庭・地域・学校で育む「市民・安力」一』
猪熊弘子編『子どもを守る防災BOOK』学研 2012
- 滋賀県子ども会連合会『K T Y活動ガイドブック』2009
- 清水賢二『子どもの安全はこうして守る』グラフ社2006
- 清水賢二『犯罪からの子どもの安全を科学する～「安全基礎体力」づくりをめ
ざして～』ミネルヴァ書房2012
- 高階玲治『学校の安全を守る「危機対応力」』ぎょうせい2005
- ベティ・ボガンボールド『とにかくさけんでにげるんだ～わるい人から身をま
もる本～』岩崎書店2001

